

■特集

安城市に今も残る花街文化「安城芸妓」 ～芸妓の歴史とこれから～

今年も残すところ1週間程となりました。先週今週と忘年会を行っている人も多いのではないでしょうか。そんな忘年会シーズンの中あんじょうしないのりょうていではあんじょう芸妓の姿を見ることができるのを知っていますか？芸妓とは宴会などの席の場で三味線や舞などの芸を披露する女性達のことをいいます。かつては日本全国で見ることの出来た芸妓は年々その数を減らしていますが安城市ではその姿を今も見ることができます。今日の特集は安城市に今も残る安城芸妓の歴史とその文化を今もなお大切にしている人達取材しました。お伝えしていきます。

忘年会シーズンの12月、師走でいつもより少し賑やかなJR安城駅前に和装姿の女性が二人。彼女達が向かう先は...
彼女達は安城芸妓と呼ばれる女性達。

芸妓とは宴席の場で舞踊や三味線などの芸を披露しお客をもてなす女性をいい、一般的には芸子とも呼ばれています。全国におよそ3千人いるという芸子がここ安城市にも今も受け継がれていて毎晩市内の宴席の場を華やかに彩ります。

明治から安城市内に広まったこの文化はどのように始まり受け継がれてきたのか、今回の特集は安城芸妓の歴史とこの文化が秘める可能性を探ります。

安城市に古くから残る花街文化、安城芸妓。
その歴史は今からおよそ140年前、明治用水が完成した頃に溯ります。
当時市内は明治用水の完成で次々と水田が誕生し、一躍農業先進地へと変化していました。そして日本デンマークと呼ばれるようになると全国から視察者が訪れその接待役として発展していったのが今も残るこの安城芸妓です。最盛期には市内に100人近くの芸子がいて安城市の発展と共に市の文化としても成長し、安城が誇るおもてなしの一つとなりました。しかし、平成に入りバブルが崩壊すると地域経済の落ち込みと共に全国各地の芸子の数は減少していきました。そんな状況の中、安城市では芸妓文化を残そうと地元経済界のメンバーが中心となり平成14年に安城芸妓文化振興会、通称「笑美素会」を発足しました。
今も尚、安城に芸妓文化が残るのは地域の文化として残そうとする町の人達の努力があったからなのです。
人数は減少しているものの、現在市内では12人の芸妓らが活躍しています。

笑美素会の発起人の一人で市内に本社がある新英ホールディングスの会長、金子功男さんは当時をこう振り返ります。

「僕がこの世界を知るようになった頃は安城にクラブが一軒だけしかなく、当時この辺りで接待すると言えば料亭で芸妓さんと呼んでそれがこの地域のおもてなしだった。周り(周辺地域の芸妓文化)が消えていったから接待するものが無くなったら安城では何で接待するんだと。ということで振興会を作って(安城芸妓を)応援しよう。」

地元の人達の後押しもあり現在も市内のおもてなし文化として愛されている安城芸妓。JR安城駅前だけでもご覧の料亭で楽しむことができます。



12月中旬、この日は御幸本町にある 料亭 川本 で安城商工会議所のメンバーがひらいた宴席の場に二人の芸妓が呼ばれました。
花代とよばれる安城芸妓の利用料は通常2時間15,000円(税別)
直接よぶのではなく料亭を介して芸妓を呼び料金は料亭の会計に組み込まれます。
宴席によべられた芸妓は舞踊や三味線の披露だけでなく宴席に交じり接待をし、場を盛り上げます。
「安城芸妓の人たちは心を温めてくれるようなそういうものをみなさん持っています。」



「初めて知った時は、これが大人の世界だとちょっと衝撃でしたね。みなさん安城に来てもらって安城の料亭で安城芸妓で遊んでもらって。会話も上手でしかたない話からなんでもこなせます。」



中には接待の場には芸妓の力が欠かせないという人も
「お酒の席はどうしてもくだけるけど一つの会話の援助をしてくれたりそのあたりをうまくやってくれたり、細やかな接待をして会社の接待やいろんな会を本当に助けてくれています。」



芸妓たちにとってお客さんと同様になくてはならないのが料亭の存在です。
美香・由美：「私たちはお店に守ってもらっている感じがするので、私たちの知らないところで(芸妓を派遣するよう)頼んでくれたりだとか、裏で動いてくれていたり、その分頑張らなきゃなと思うところもあります。」



料亭かわ本 女将 「やっぱり座敷が華やか。楽しいです。お客さんの顔が全然違うんですよ。それなりに芸妓さんも気を遣ってくれるし、その気を遣ってくれる気持ちをお客さんもわかってくれるから皆さんハッピーな顔をされていますよ。現に若い人や(芸妓を)知らない人が踊りを見ると結構みなさん喜ばれるんですよ。」

芸妓、料亭、そしてお客。三者があって栄えてきた安城芸妓。
しかし、この文化を未来に残すために今後の課題は多くあるといいます。
由美：「若い女の子たちが見てこういう仕事もあるんだよというのを、体験からでもいいからやって頂けたらと思います。」
料亭かわ本 女将 「料理屋も高齢化、後継者問題で悩んでいて、お客様も新しい方が育っていないんですよ。だからすごく狭いんですよ(芸妓が)活躍する場が...」

そんな中、御幸本町の芸妓を楽しめる うなぎや 吉野家 では芸妓文化を多くの人に知ってもらおうと今年新たな取組みを始めました。
「芸妓さんの頼み方であるとか金額であるとか(お客さまから)わかりづらいという話を頂いて、芸妓さんの良さをわかりやすい形でお客さんにパッケージングとして提供できたらと思い定額制をつくれればお客さんも明朗で注文しやすくなるのではと作らせていただきました。」
気軽に芸妓を楽しんでもらいたい、創業120年の吉野家がこの取組みを行ったのには芸妓文化と共に歩んできた店としての思いがあります。
「安城に芸者がいるな。遊んでみたいなと思っているところから、一步踏み入れてもらったら『こんなに楽しいならもう一回』となって頂きたい。」



「伝統文化を受継いで安城に残っている。ということは非常に価値がある。」
「こういうものを残していくというものの意義と育てていくという意義が、この町には十分にあると思います。」

明治から続く安城芸妓。地域の更なる発展の為にはこのおもてなし文化を大切につなぎ育てていくことが大切な
かもしれません。

安城には今も素敵な芸妓文化が残っていましたね。芸妓の減少などまだまだ課題は多くあるということですが、う
なぎやの吉野家が今年、手頃に芸妓が楽しめるコースを用意したように今後もこの文化を残していくために市内で
は様々な取り組みが行われていくそうです。

キャッチタイムでは安城芸妓のこれからを今後も取材しお伝えしていきます。

